

---

# 桑の樹の枝の天蓋の内

神光寺かをり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

桑の樹の枝の天蓋の内

### 【Nコード】

N4071U

### 【作者名】

神光寺かをり

### 【あらすじ】

Webサイト「お姫様倶楽部 petit」から転載。

筵を編み、草鞋を売って糊口をしのぐ少年の家には、桑の巨木が生えている。

遠い先祖が植えたその木の懷で、彼は天を仰ぐ。

少年の名は劉備。

小さな出会いをきっかけに、時は動き出した。

400字詰め原稿用紙換算48枚。

帰り道・桑の樹縁起・桑下の譚・駆ける先の夢、の4章構成。  
三国志・蜀（嚴密には後漢時代ですが）

## 帰り道

「ほい、その人」

初夏の日差しがまぶしかった。

劉叔郎じゅうしゅくろうは聞き慣れない声に、目深に被っていた編み笠を、わずかにあげて振り向いた。

薄汚い童子と痩せた山羊を連れた、顔色の悪い食い詰め易者が、胡散臭気な笑みをこちらに向けている。

「俺の事かい？」

「そう、おまえさんの事だよ。……おまえさん、いい相をしているねえ」

「いくらほめても観料は出ないよ」

叔郎は笠の縁を引き戻して、立ち去ろうとした。

踏み出した一歩目が大地を蹴る前に、易者はぼそりとつぶやいた。「そうかね。……商売は繁盛したようだが」

そういつて彼が指したのは、叔郎が担いでいた天秤棒の先だった。

そこには、売れ残りの草履が二足、申し訳程度に下がっている。

叔郎は、ビタ銭で膨れた懐をさすった。

「こいつらは、もう、行き先が決まってるよ」

銭という奴らはせつかちで、貧乏人の懐で長逗留する余裕を持っていない。

易者は破顔して、

「要らん、要らん。ただ、おまえさんの人相が珍しかったんで、声をかけたまでの事さ」

「見えもしない笠の内の人相が珍しいかどうかを、老師せんせ、よく判りなすったね」

叔郎が茶化すと、易者は自分の両耳たぶを引っ張って見せた。

「耳みみの長いのは貴相かつ吉相でな。おまえさんのように特段立派なヤツは、『垂肩耳すいけんじ』てえ言つて、『九五の尊、身は実に賢し』な

相だ。つまり、おまえさんの耳には、おまえさんは頭が切れてことんと出世する、と表れているのさ」

易者に言われるまでもなく、叔郎の耳は、文字通りの『垂肩耳』だった。

外耳全体が大振りな上に、垂れた耳たぶは深編み笠の縁からはみ出す程に長い。

叔郎はこの耳を嫌っている。口さがない悪友共が彼を「兎」などと呼ぶのが、これの所為だからだ。

彼は口をへの字に曲げて、己の耳たぶを摘んだ。

「これが貴相なら、兎は軒並み皇帝だ」

「高祖も光武帝も、耳朶のでかい方だった。また武帝も福耳だったぜ。……ま、拝顔の叶うた訳じゃねえが」

高祖こと劉邦は漢……西漢……を興した人物、その漢帝国が百有余年を経て佞臣に篡奪された時、帝室を復興させた……東漢……のが光武帝・劉秀である。

易者が最後に名を挙げた武帝は、諱（本名）を劉徹と言う。

劉邦の曾孫に当たり、西漢の第七代皇帝である彼は、漢の版図を

……その諡号が示すように……武力に因って飛躍的に広げた。

『平定』された側にとつては、いい迷惑だが、漢王朝の視点から見るとは、英雄的皇帝である。

「肖像画なんて、当てになりやしない。偉くなった人の顔は、偉く見えるように描くんだから」

叔郎は慥然とした声音を出した。何とも子供じみた口調だったが、言うことは的を射ている。

易者も頷いていた。

「然り、然り。偉い人は偉い顔をしてるってえのが『易学』の考え方なんでね。だからこそ、何かの拍子に偉くなっちまった凡人は、さも自分が元々偉い人相をしていたかのように振る舞う、てえ訳さね。つまり、それだけみんな『易』を信用しているってことさ」

「まあ、そういう言い方もできるけれど……」

個人的には承知しかねない。けれども世の中の考え方はこうなのだ。叔郎は渋々易者に賛同して見せた。

易者は更に大きく頷いた。

「だからおまえさんも、この儂の言うことに、少しだけ耳を傾けな」叔郎が返事に窮していると、易者はひよいと伸び上がって、強引に彼の編み笠を取りあげた。

昼下がりの目映い光に目をしかめたのは、陽に焼けた、つるりとした頬の、整った顔立ちをした少年だった。

彼の広い肩幅と高い上背から、二十歳前後の青年を想像していたらしい易者は、一瞬、目を見張った。

しかし、すぐに出来の良いカブラでも観るかのように、彼の品定めを始めた。

「ふむ、やはり頭骨長く、面体は細長い。眼は切れ長で、眉も長い。上顎前歯も他に比ぶればやや長いか……。耳朵と併せて『六長格』よな。命数長く大志を達する相だ。それから、両腕長く膝下に達す

……」

「いくら何でも、猿じゃあるまいに、そんなに長かあないよ」

叔郎はむくれて、二つ目の引け目を隠すように、胸の前で腕を組んだ。

易者は少年の心地など意にも止めず、続ける。

「口を挟むでない。両腕が長く膝下に達するのは『領袖格』りゅうしゅつかくと云つてな、王霸の相なのだぞ。……ほれ、次じゃ。目ん玉だけで横を向いてみい。己の耳が見えるか？ それは『怙吉』こごきちの相だ。この相を持つ者は信頼に足るから、怙りにして吉いと言われておる。……つまるところ、お前さん、自身の好むと好まざるとに関わらず、いろんな連中から慕われるつちゅう相をしとる、という訳じゃ」

しつかりと良く聞き取れる早口でまくし立てた後、易者は、ほうと嘆息した。そうして、足下に目を転ずると、連れの童子に向かつて言った。

「よう見ておけよ。教本の絵図なんぞよりも良い、吉相の見本ぞ」

五・六歳ぐらいい見受けられる、汚れた、しかし利発そうな童子は、易者に言われるままに、叔郎の顔を穴の明くほどに見つめた。「で、結局、俺はどんな人間なのさ？」

とことん褒めちぎられて、ようやくその気になってきた叔郎が、身を乗り出して尋ねると、易者は眉を引き締めて答えた。

「漢高祖の相」

「それはまた、大仰な」

叔郎の喉から、半分呆れ、半分昂揚した声が漏れた。すると易者は、

「当たるも八卦、当たらずも八卦。信じる信じないは、おまえさん次第よな」

と、再び胡散臭い笑みを浮かべた。

「じゃあ、当たる方の八卦を信じようか」

劉叔郎はふんわりと笑うと、天秤棒の先から草履を取った。

「銭の行く先は決まっているけど、こいつらはまだ『嫁入り前』だ。観料代わりに貰ってくれよ。……老師の沓は、ずいぶんくたびれているようだしね」

易者は深々と頭を下げ、草履を受け取った。そして

「ああ、いけない。易を立てるつてえのに、おまえさんの生まれも名も、聞いちゃいなかったな」

と苦笑いした。

「延熹四年春の生まれ、名は劉叔郎」

彼は満面の笑みを浮かべて答えると、直後に、

「老師の御名は？」

と、接げた。

「李定。……ま、おまえさんが大成した頃に思い出してくれや。それまでは、儂の事など忘れっちまいな」

李定は、二足の草履を肩に振り分けると、童子と山羊を引いて、行った。

## 桑の樹縁起

劉叔郎の住まいは、幽州ゆうしゅうにあった。現在は河北省と呼ばれている辺りである。

漢帝国当時の行政区分は、少々ややこしい。

帝都・洛陽以外の国土は、十三の「州」に分割されていた。また、「州」の中に「国」が含まれている場合もある。

「州」とは現代で言うところのと「道府県」……時代が違った言い方なら「藩」のようなものである。「国」というのは、王族に与えられた領地のことを指す。

「州」は複数の「郡」で構成され、「郡」にはいくつもの「県」がある。そして、「県」は多くの「町・村」で成り立っている。

また、古代中国に独特な事なのだが、都市は高い塼と強固な門に囲まれた、一つの城塞を成している。

塼の中に人々のくらす町並みがあり、更に城壁を持つ行政の建物がある。

「城下町」ならぬ、「城内町」……そんな言葉はないけれども……」であつた。

農地は城壁の外にある。

農民達は朝、城の中から田畑に「出勤」し、夕刻城門が閉まる前に城内の町に戻るのだ。

だが農地の開拓が進むと、この形態が崩れる。城から遠く離れた田畑には「出勤」しきれなくなる。

こうして、田畑の周囲に住む者が現れ、そこが集落となり、やがて「村」ができあがる。

行政の最小単位は……つまり、役所と役人が置かれているのは……「県」で、村々の長はそのあたりの豪族や、古老達が勤めるのが常であつた。



さて。

現在の河北には中華自民共和国の首都・北京があるが、当時の幽州に東漢帝国の首都・洛陽があるはずもない。

ここは北の果ての一地方都市に過ぎないのだ。僻地呼ばわりされて当然の田舎だ。

そんな田舎都市の更に片田舎……【タク】郡【タク】県の城壁の外……の小さな村が、叔郎の故郷である。

村の名を「楼桑村<sup>ろうそうそん</sup>」という。

その縁起は、古い。

西漢の七代・武帝の兄で、劉勝という貴族が、この地にほど近い中山国（河北省南部）に封じられた頃にさかのぼらねばならない。

劉勝は、判っているだけで百二十人余の男子をもうけたという。伝説的好色家だ。

同数の姫君があつたとして二百四十人、名の残っていない子供達がいると見て、合わせて二百五十〜三百人の子沢山である。

英雄色を好む。だが色好みが全て英雄とは限らない……という見本のような人物だった。

その百二十人の内の一人、劉貞が『陸城亭候<sup>りくじょうていこう</sup>』という爵位を与えられ、【タク】郡の片隅に屋敷を構えた。

この劉貞、些細な事から庶人に落とされた。

……おそらくは、朝廷側から陥れられたのだろう。

いかに大漢帝国といえども、百二十人×2 + の王族を無駄に養えるほど、裕福ではない。

さりとて他に行く宛もなく、彼はそのまま【タク】郡に住み着いた。

土地屋敷が召し上げられずに済んだのは幸いだったが、なにしろ収入が無い。

劉家は、筍生活を余儀なくされた。

幾星霜が過ぎて、劉家の財産は、傾がった荒屋と、その東南にそびえる「劉貞が植えた」という一本の桑の樹だけとなった。

おおよそ二百年の樹齡を重ねた樹は、天を突くほどに高く、天を覆うほどに枝を張っていた。枝振りを遠く眺めると、背の高い建物のように見えた。

桑の楼……以前は「陸城村」とか「劉家莊」とか呼ばれていた村は、いつしかそう呼ばれるようになっていた。

……と、というのが楼桑村の縁起である。

劉家の物語は、もう少し続く。

劉貞から十世下った頃の当主・劉雄じゅうゆうは、人柄よく、学があるというので、推挙され、県令（県の管理職）にまで上った。

その矢先、一人息子の弘こうが早世した。

気落ちした雄は、病を得て亡くなる。

妻も、呆気なく後を追った。

哀れなのは、十六で嫁ぎ、十七で子を産み、十八で寡婦となった劉弘の嫁である。彼女は以来、喪服をまとって暮らした。

極貧の中に残された彼女は、縄をない、筵むしろを織り、草履を編んで、必死に働いた。

その筵や草履を、亡き夫の忘れ形見の男児が、街で販ぐ。

そんな小商いで、劉家は糊口を凌いでいた。

……その男児が、劉叔郎なのである。

熹平三年、西暦175年の晩春。

叔郎は数えて十四歳の元気な……有り体に言えば腕白な……少年であつた。

日頃の彼は、よく母を手伝う、商売上手な孝行息子である。

しかし、仕事をしなくてもよい日には、痩せ馬にまたがって、母親に行く先を告げずに遠乗りに出かけてしまう。

これは、余談になるのだが……。

漢代以前の史書を読む中で、「騎馬、あるいは騎射きしや（馬上から矢を射ること）に優れる」と注釈の付いている人物とぶつかったなら、

その者は現代人の想像以上の乗馬技術を持っていた、と確信している。

何故なら、漢の鞍には鐙あひみがないのだ。つまり、馬上で手を放して足を踏ん張ることができない。

腿で馬の背を締めてバランスを取らねばならないのだから、並みの平衡感覚・運動神経では、馬に乗ることすらできないのだ。

漢民族が鐙を開発できなかったのは、彼らに騎馬戦という戦闘方式の概念がなかったためである。

馬に荷車のような戦車を引かせ、そこに御者と戦闘員を二・三人乗せて戦う、戦車戦が主流であった。

東漢（後漢）末には、北方の遊牧民達と主に「戦争」という名の交流が持たれ、その影響で、騎兵という部隊も編成されるようになってはいた。

それでも、鐙付きの鞍が全土に広がるまでには到っていなかった。当然、劉叔郎の痩せ馬に、そんな「最新兵器」は備えられていない。

#### 閑話休題。

叔郎の遠乗りは、日が落ちるころに終わる。

彼は夕げに間に合うように、ちゃんと帰ってくる。

それでも母親は、できることなら出かけないで欲しいと願い、もっと早く帰って来て欲しいと祈っている。

彼がたいがい怪我を負ってくるからだ。

あるいは狩りで、あるいは喧嘩で。青痣・擦り傷・刀傷……命に別状のなかった疵が、彼の体を埋め尽くしている。

ところが。

その腕白の様子が、ここ数日の間、すこしおかしい。城下での商売から戻ってから、一度も外出しないのだ。

家の中にいないと思うと、東南の桑の樹上にいる。太い横枝に身

を任せ、じつと瞼を閉じている。

日頃の活発さがある故、静かにしていれば静かにしていたで心配になる。母親は

『どこぞ具合でも悪いのかしら』  
などと勘ぐつてもいた。

その朝、叔郎は織りかけの筵の前に座っていた。

手は、動いていた。しかし、心ここにあらずといった風で、目は窓外の蒼天の中を泳いでいる。

母親の不安は、ついに声になった。だがそれは、穏やかな、何気ない言葉だった。

「阿叔あしゆくや。何か考え事かい？」

「阿あ」というのは、日本語の「ちゃん」に相当する、子供の愛称である。

叔郎は青空の映り込んだ瞳を母に向けた。

「ねえ母者。もし俺が長いこと家を空けたりしたら、やっぱり寂しいかい？」

おどおどとした口調。

真剣な瞳。

「……空けるつもりなの？」

母親は、寂しそうな、仕方がなさそうなまなざしで、一人息子を見つめた。

叔郎は慌てて頭を振った。

「いや、もしもの話だよ。……何でもない」

彼は微かに笑むと、窓の外に目を移した。

桑の枝々は、その身を萌え立つ若緑で装っている。夏が深まれば葉は大きく開き、濃い緑の薫風を発するようになる。

そうして、自然の木でありながら、巨大な建造物のように、蒼天を覆い尽くすのだ。

叔郎は桑の樹の枝振りをしばらく眺めていた。やがて、ぼんやりとした目が、その根元に転じられた。

直後、彼は立ち上がったかと思うと、窓枠に手をかけた。太い幹に、いつの間にもやら荒縄が巻き付けられている。

縄の先に、一頭の山羊が繋がれている。

山羊の脇に、一人の童子が立っている。

「阿叔、どうかしたの？」

母の問いかけの語尾が消えぬ間に、叔郎は窓から外へ飛び出していった。

駈けながら怒鳴る。

「坊主！ お前、李老師の子だろう！？」

童子は身を引きながら、小さく頭を振った。

「オラは、お師匠サの弟子だよ」

『李定の弟子』は、童子とは思えないはっきりとした口調で答えた。

だが、発音にひどい訛がある。

どうやら、童子はかなり北方の、国境近くの出身らしい。

「弟子、だって！？」

叔郎は童子の両肩をつかんで、叫く。童子はおびえながら、大きく頷いた。

「お師匠サから便りを預かってきたんだ。劉サに渡すようにって」「便り？」

童子が恐る恐る差し出したのは、相当にくたびれた絹の切れ端だった。

この頃はまだ紙は普及しておらず、文字は木や竹を薄く細く切った板の木簡や竹簡が、布に書かれていた。

李定からの便りは、着物の袖であったモノに書かれている。着古した無地の袖口を、叔郎は数日前に見た覚えがある。

そこに、食い詰め易者が書いたものとは思えない、かつちりとした墨跡があった。

劉叔郎は高祖の風を有すなり。

之は無より身を起こし、一業を成す相なり。

一業の大小、我は知らず。

さりとして、父祖の家名を再興せんとは、

夢々思し召さぬよう、申し上げるものなり。

其れすなわち吉なり。

李定、天命を拝し、記す

「大袈裟だなあ」

叔郎は鼻で笑った。しかし眼は笑んでいない。瞳の奥に、何かを深く考えている気配がある。

「ほいでねえ」

童子は懐を探って、なにやら書き込まれた別のぼろ布を出した。わずかな文字を必死に読みながら、言う。

「お師匠サから、劉さんちに、桃か、柳か、桑の木が生えてたら、褒めしって言われた」

叔郎は、彼らの上に影を落とす、桑の巨樹を見上げた。

「桃、柳、桑は、盗、流、走に通じるから、縁起が悪いって話なら、よく聞くけど？」

「凡人の家ならば凶なれど、貴人の家ならば吉なり」

童子は師父の筆跡をたどとどしく読み上げた。

「坊主のお師匠は、余っ程俺を貴人に仕立て上げたいらしいな」

「坊主じゃねエ。カンてえ名があらあ」

童子は穴のあいた沓先で、地べたに『耿』と書いた。

『中原なら、「コウ」と読む』

瘦せても枯れても皇室の出である。漢帝国の中心地、いわゆる「中原」で使われている言葉を、叔郎は知っていた。

そして「北の最果て」に住まう漢族の言葉が、境を接する胡族……つまり外国……の言葉の影響を受けていることを、同じ地に住まう彼が知らぬはずがない。

叔郎は笑った。

決して嘲笑ではない。

久方ぶりにお国訛りを聞き、思わずほころぶ……そんな笑みだった。

「……ともかく、お前さんのお師匠に伝えとくれ。『我、貴人の道  
を知らず』とね」

「お師匠サは、もう居ねえ。これが遺言だ」

耿童子は鼻水をすすり上げると、師父の形見を握り締めた。

不安の色濃い瞳が、叔郎を見上げている。

叔郎は、今は気丈にしているが、一寸したきっかけさえあればスグにも泣き崩れそうな幼子の、小さな肩を抱くと、我が家の窓に目を向けた。

そこに、母の笑顔があった。

「阿叔、お前いつだったか、兄弟が欲しいと言っていたね」

劉叔郎は大きく頷くと、「弟」の小さな体を抱き上げて、母の元に走った。

## 桑下の譚

楼桑村の劉家に身ぎれいな若い客が来たのは、涼風の吹く初夏の  
昼上がりの事だった。

若者の名は、劉亮<sup>りゅうりやう</sup>、字<sup>な</sup>(通称名)を徳然<sup>とくぜん</sup>という。

三代前に楼桑村を出て【タク】県城内に移り住み、財を成した、  
劉家の分家の嗣子である。

彼は本家の戸をたたかず、その東南の桑の樹の元に寄った。

樹は、根元から一丈半程(3m強)の所に、太い横枝を差し出し  
ている。

その上ではじける陽の光の中の一つの影を、彼は見上げた。

「叔郎！」

徳然は「影」に呼び掛けた。

するとそれはユルリと揺れ、グラと傾き、枝からゴロリと外れ、  
ゴウと風を切って落ち、ドンと音を立て、彼の目の前に「着地」し  
た。

舞い上がる土埃の中で、悠然とあくびをしている又従弟に、徳然  
は呆れ顔で言った。

「その降り方は止めないか。心臓に悪い」

叔郎は、眠たそうに目を擦りながら、

「……叔父さん達の前ではやらない」

と答えた。

舞った土埃が二人の身体にまとわり着く。徳然は、服に着いた埃  
を叩いた。

「あそこで昼寝すること自体を止めたらどうだ？ 本当に落ちては  
洒落にもならんぞ」

「嫌だ。この木は乗り心地が良いんだ」

「乗り心地？」

「この間、子敬<sup>しけい</sup>叔父さんが来て言った。この樹の枝振りは、まるで



羽葆蓋車（やうぼうがいしや）のようだ、とさ」

「あの都かぶれの叔父さんがかい？」  
徳然はわずかに眉を顰ひそめめた。

劉子敬は二人の従叔父（いとこおじ）だった。

悪い人物ではない。ただ、一つ悪癖がある。

彼は、若い頃に洛陽へ遊山した。

その時偶然、都大路で皇帝の行幸に遭遇した……と、彼は言う。

凜々しい執金吾（しつぎんご）（警視長官）が先導。よく練兵された近衛兵が続  
き、雅な調べに合わせて楽女舞姫が踊り行く。そして羽葆（羽根飾  
り）の付いた蓋（幌）馬車のきらびやかな飾り細工。御簾の奥には  
主上（おかみ）（皇帝）が在す……。

この光景を人に語るのが、彼の趣味である……こと有る事に、何  
度でも、しつこく。

一族の者はおるか、近郷近在の人々が皆、この話を知っている。  
そして、もう聞きたくないと願っていた。

「そう思つて寝ると、良いユメが見られる」

叔郎は服の埃と、自身の頬を叩いた。軽い痛みとともに、眠気が  
すつと引いてゆく。

眠気覚ましの仕上げに大きく背伸びをしている叔郎を、徳然はま  
じまじと見た。

自分よりも三歳ばかり年下の少年が、時折己よりもずっと大人び  
て見えることがある。

たとえば、彼の瞳が何も無い筈の天空を、じつと見つめている時  
などがそうだ。

そんな時の叔郎の、彼方を眺める視線は、徳然に茫漠とした不安  
と、漠然とした羨望とを抱かせる。

『いいユメ、か。コイツの事だ、きっと大きな希望（ゆめ）なのだろうな。  
私の考えなど及ばない、とんでもなく大きな……。そうして、いつ

かこいつは、その希望を叶えて、私の手の届かない所へ、独り、駆け上がって行くに違いない。そうになったら、きっと私の事など忘れてしまう……」

言い知れぬ虚しさが、徳然の心を捕えた。

「徳然兄、今日は急に呼び出してすまない」

運良く叔郎の唇が動いたので、彼は弟分に隙を見せずに済んだ。

「え？ ああ……」

自分が抱いていた小さな嫉妬を押し殺し、徳然は無理矢理平静を装った。

「一体何の用だ？」

「実は、元服の祝いをやるうと思って」

叔郎が満面に穏やかな笑みを浮かべた。

「元服？ お前の、か？」

訝し気な問いに、彼は大きく頷いた。

元服とは、士大夫しだいふ（平民でない男子）の成人式である。数えで十五歳前後に行うのが普通だ。

この時、名を小字こあざな（幼名）から、諱いみな（本名）に改め、字（通称）を付けるのがならわしだった。

徳然も一昨年元服して「亮」という諱を貰うまでは、「伯郎はくろう」と呼ばれていた。

これは一番上の男の子、ほどの意味である。

わざわざ改名するには理由があった。

漢人は「言葉」や「名前」には「力」があるとす、いわゆる言魂信仰を持っていたのだ。

『力』は水のように、高い……強い……所から低い……弱い……所へ流れてしまうと思われていた。

己よりも勝っている者に本名を呼ばれるのは構わないが、己よりも弱い者に連呼されては、『力』が逃げてしまう、という訳だ。

そこで、親や兄弟、あるいは身分が特段に高い者を除いて、本当

の名前で呼ばぬようにして、普段は仮の名を別に用いる。  
これが改名の理屈である。

徳然は目を見開いた。

「だつてお前、今年十四になつたばかりじゃないか!？」

「俺は、劉家の当主だ」

叔郎は力強く言う。

「例え単家せんかでも、皇室に連なる名門の当主が、家督を嗣いで十二年にもなるのに、『子供』でいちゃ、まずいよ」

単家とは「勢力のない家」の意だった。

草鞋売りをしてようやく生計を立てている今の劉本家には、確かに勢いなどない。

「……それに遊学に出る前に元服しておいた方が、区切りもいいだろう?」

叔郎が胸を張った。

徳然は、思わず吹き出した。

又従弟の腕白振りには、親しくしている徳然の良く知るところである。

その腕白自身の口から遊学などという言葉が出てくるとは、終ぞ思いの寄らぬ事だった。

だから、つい正直に、彼は言ってしまった。

「へえ、お前にも学問をする気があつたとはなあ」

「笑う事はないだろう」

叔郎は無然とした声をあげた。

「一族を集めて盛大な祝いの宴を開くのは無理だけど、せめて徳然兄にだけは祝福してほしいから、ご馳走を作ってくれ、と母者に頼んだのに」

彼はふいと後ろを向くと、ただ一人、わが家へ向かって歩き始めた。

「……いいさ。徳然兄、もう帰りなよ。遅くなると、あの恐い叔母

さんが心配するだろうから」

大きな、だが幼い背中が、すねた口を利く。

徳然は慌てて彼の後を追いかけた。

「悪気はなかったんだ、許してくれよ。伯母さんの料理を、私にも食べさせてくれ！」

泣きついても、叔郎はへそを曲げたまま振り向きもしない。

そこで徳然は、彼の前に回り込んで、声を張り上げた。

「お前の学費も出してくれるよう父に頼んでやるから、機嫌を直してくれ！」

それは唐突な提案だった。

叔郎が大きく見開いた目を徳然の顔に向けると、彼はニツと笑って又従弟の両肩に手を置いた。

「【タク】郡の出で儒学者の廬ゝ老師が、州都で私塾を開いておられるのを知っているだろう？ その塾が門下生を募っていてね。私とお前と二人して、そこに入門しないか？」

又従兄の提案は、単家の倅にとって願ってもない話だったが、叔郎は困惑した。

彼は顎を引いてうつ向き、己の大きな耳たぶを右の手指の先で摘んだ。……深く考え込むときに、叔郎の指先は、どという訳か自然と耳元にゆくのだ。

大きく息を吐いた。

曾祖父の代に分かれた徳然の家は、叔郎の家とは全く家計を別に行っている。縁などないと言われてもおかしくない間柄であった。

実際、徳然の母は貧しい「本家」との付き合いを快く思っていない。当主・劉りゅう元げん起の意向がなければ、嗣子の徳然が叔郎と交遊することもなかっただろう。

だが。

いかに元起が好人物でも、自分の子供ではない叔郎の、しかも何年続くかも判らない勉学の費用を、援助してくれるのだろうか。

それに、いくら草鞋を売って糊口をしのがねばならぬ暮らしぶり

だとは言っても、「他人」から援助を受けることは心苦しい。

答えることの出来ない又従弟の肩をぐいと掴むと、徳然は力強く説いた。

「母は反対するだろうが、父は出してくれる。父は、お前を高く買ってくれているからね。まるで口癖みたいに『叔郎は並みの子ではない。一族の中で、あれが一番見込みがある』と言っているんだ。

……毎日、私の顔を見る度にね」

徳然の顔は笑みで満ちていた。まるで、自分が毎日褒められているように。

「本当に叔父御が俺の学費を出してくれると言うのなら、こんな嬉しい事はないよ。けれど……」

それでもまだ躊躇する叔郎の肩を、徳然は強く叩いた。

「自分に都合の良い『他人の親切』は、利用しなければ損なだけだ。ましてや、一族の親心だ。有り難く受けておけ」

随分と迷った後、叔郎はようやく笑った。

「有り難う」

それは、はにかみと寂しさと力強さが融合する、なんとも不思議な微笑だった。

叔郎が時折浮かべるこの微かな笑みは、なぜか他人に安堵感を抱かせる。

『きつと、父もこの笑顔に憑かれたんだろう。なにしろ私が魅かれるくらいだから』

徳然の口元も、自然とほころんでいた。

小さな風に乗って、子供の嬌声が聞こえた。

荒屋の厨房から、宴の気配が漂って来る。

徳然はそれを鼻孔の奥で感じ取ると、腹の虫を押さえつつ、改まった調子で叔郎に問いかけた。

「さて、宴を始める前に一つ聞きたい。元服するととなると、名を改め、字を付けねばならない。名付け親が必要なら、父に頼んでやる

が？」

「申し訳ないけど、遠慮しておくよ」

叔郎は首を横に振った。

「実は父が、生まれたばかりの赤ん坊に、立派な名前を遺してくれていてね。……立派すぎて、本人が悩んじゃまう位のを、さ。でも、その大層な名を名乗る決心が、このごろようやく付いたんだ。それに合うような字は、もう自分で考えたし」

「へえ、どんな名だい？」

徳然が身を乗り出して訊く。

叔郎は嬉しそうに笑った。

「名はビ。字はゲントク」

重ねて問う。

「どんな文字を書く？」

今まで劉叔郎と呼ばれていた少年は、長い腕を伸ばすと、中空に三つの文字を書いた。

『 備 玄德 』

その瞬間、突風が吹いた。

少年の名を抱いた風は、桑葉の天蓋を揺らしながら、蒼天へと昇って行った。

## 駆ける先の夢

熹平四年、西暦175年の正月。

中華の国は太古より太陰太陽曆たいいんたいようれきを使っていた。従って、正月は立春と共にやって来る。

例年ならば文字通り春を迎えるはずが、その年はいつになく寒さが厳しかった。

劉備玄德りゅうびと劉亮徳然りゅうりやうは、辻の日陰に名残雪を見ながら、州都の裏通りを歩いていた。

「ここが筆屋、あちらが墨屋。うん、写本請負などは、さすがに廬老師のお膝元と言えような」

徳然はやたらと辺りを見回している。あまりに「お上りさん」然とした彼の様子に、玄德はため息を吐く。

「書写に勝る勉学は無しと聞く。それを他人に任すなど、曲学阿世きよくあくあせいもよいところさ」

こと学問に関しては又従弟よりは己の方が上だと確信していた徳然は、彼の理になかった言葉に驚き、少々腹を立てた。

「お前は写本をしたことがないから、その大変さを知らんだ」と、言い捨てる。

そして大人げないとは思いつつ、プイと横を向いた。その横目に、純白が映った。

雪、と、一瞬思いもしたが、残雪ならば土埃を吸って茶に染まっている筈である。

純白は静かに佇み、わずかに動いている。真っ白な馬だった。

引き締まった筋肉の付いた、大柄な、美しい馬だ。飯屋の門扉に手綱で縛り付けてある。

馬主の姿は見えない。

「良い馬だなあ」

徳然は照れ隠しもあつて、大袈裟なくらいに驚嘆してみせた。

「叔郎は無類の馬好きだ。馬の話をするれば、都合の悪いことを忘れてくれる」

そう踏んだのだが、玄德は一言も発してくれなかった。

彼は、じつと見つめていた……馬ではなく、その背の鞍を。

徳然も、鞍に目を転じた。

粗末な革の鞍は無数の傷に覆われていた。相当に使い込まれていることは、彼にもすぐに判った。

『ありきたりの安鞍に見えるが、何が面白いというのだろうか？』

首を傾げ、玄德の顔をのぞき込んだ。

彼は、鞍にぶら下がっていた金具に目を注いでいる。

それは半円形をしており、鞍の両脇に一つずつ付けられている。

大きさは四寸（漢代の一寸は、およそ2.3〜2.4cm）程度である。

「何に使うのか……」

ぼそ、と、玄德がつぶやいた。

「車でもつなぐんだらう？」

徳然が言つと、彼は首を横に振った。

「この馬は荷なんか引いたことがないさ。

大体、力仕事をするヤツは、肩に肉が付いて関節が太くなるんだ。騎馬にして速く走らせると、こういう締まった肉が付く」

「じゃ、ただの飾りだ。彫金がしてあるし」

確かに金具には素朴な模様が彫りつけられている。

しかし、模様と同じくらい密度で、小さな傷も負っている。

それに、全体的に薄汚れていて、泥土にまみれている。

玄德は右の耳たぶを摘んだ。

直後、彼は微かにニツと笑った。

白馬の背に手を掛け、ポンと大地を蹴った。

大柄な体躯がひらりと舞ったかと思うと、彼は鞍の上に座っていた。



膝を軽く曲げると、件の金具は足を掛けるに調度いい場所に付いている。

彼は悠然と手綱をほどき、馬腹を蹴った。

白馬は一声いなくなると、十年の主人が操っているかのごとく、軽やかに駆け出した。

「叔郎！ お前、ヒトサマの馬をつ！」

又従兄の怒声など玄徳の耳に届かない。彼に聞こえるのは、ただ風の音ばかりだ。

ふっと、右手を手綱から離す。

金具を踏み締めていると、右腕が思う以上に自由に動かせる。

「よし」

左手も離れた。

上体がぐらついたが、それは一瞬のことだった。

馬の背を抱える腿に力を入れれば、体の揺れはぴたりと止まる。

玄徳は確信した。

『やはり、これは足を掛ける器具だ』

再び手綱を取ると、馬首を返した。

『それだけ解れば、充分』

で、あった。

元いた場所に取って返すと、蒼白い顔で震えている徳然の横に、見知らぬ大柄な青年が立っているのが見えた。

身の丈は八尺（約185cm）に近いだろう。派手な蜀錦しよくぎんの上着を無造作に羽織っている。

現在の四川省近辺をかつては蜀と呼んだ。

太古より養蚕と刺繍が盛んで、蜀錦は最高級織物の代名詞でもあった。

その煌びやかさが、嫌味に見えない。

彼の、彫り深く鋭い目は、馬上の玄徳を見据えている。

玄徳はにっこりと笑った。

「大哥タイクイ（長兄や年上の者への尊称）、良い鞍ですね」

青年は目を見開いた。口もぽかんと開けている。

馬泥棒に一喝加えようと待ちかまえていたものを、当の盗人にこれほど堂々と振る舞われては、氣勢も削がれようものである。

彼は玄徳が元通りに馬を門扉につなぐさまを、呆れ、感心し、じつと見ていた。

馬をつなぎ終えると、玄徳は彼に正対した。

小柄な徳然はもとより、故郷近隣では一番の巨躯を誇っていた玄徳ですら、わずかに見上げねば彼の顔を見ることができなかった。

「お主、面白いことをぬかしたな？」

彼は大きく通る声で言った。

「……馬を褒めずに、鞍を褒めた」

「思ったままを、思った通りに言ったまで」

玄徳は落ち着いた声で応えた。

青年は四角い下顎の、ようやくく生えそろったばかりの髯（ぜん）

あごひげ）をなで、からからと笑った。

「鎧（あぶみ）という。烏丸（うがん）や鮮卑（せんひ）どもは、我ら漢族より劣るのに、度々我らに戦を吹っ掛け、しかも決して大敗をしない。その理由が、それだ」

烏丸・鮮卑とは、北方の騎馬民族である。ほかの少数民族も一まとめにされて、「胡族（こぞく）」とも呼ばれる。

普段は「万里の長城」よりも北で遊牧生活をしているが、時折「漢の領土」に侵入し、紛争する。

戦の原因は領界争いが主だが、その奥には、漢族の驕慢が棲み付いていた。

家を建てず、畑を持たず、文字を使わぬ彼らを、漢族たちは蔑んでいる。彼らを「北狄（ほくてき）」……北の山犬……などと呼ぶのは、そのせいである。

漢族は自身の『文化』を最高のものと信じており、それ以外を認めようとしない。

騎馬民族達も自身に誇りを持っており、それを見下されるを快し

としない。

意地のぶつかり合いで戦は起こり、意地の張り合いで争いは止まない。

戦争は延々と、続く。

青年は、玄徳の鼻先に己の顔を寄せた。

「使い勝手はどうであった？」

彼は鎧を指している。

小意地の悪い笑顔を、玄徳はじつと見据えて、答えた。

「これに足を掛けると、手綱から手を離しても、上体の安定を保てました。馬に戦車や御者などという厄介な荷物を引かせることなく長柄物や弓で戦うことができる分、早く、長く走ることができる。我ら漢族が彼らに勝てぬのも当然」

「勝てぬ、か？」

青年は玄徳の胸を軽く小突いた。

悪意のない仕草だ。

玄徳は小さく頷いた。

「漢人は馬を力と考えています。だから戦の時も、馬に直接またがらず、車を引かせる。ところが胡の民は、馬を脊と見ているらしい。かような馬具を考え付くのは、馬上でも地を踏み締めんと望む為でしょう。……目に見えぬ力を操るのは容易ではありません。ですが、己の履く脊ならば、意識することなく操れる。……違いますか？」

「はははっ」

青年は鷹揚に笑った。

一頻り笑うと、

「貴公ら、廬老師の塾に入る予定か？」

と、訊ねる。

徳然が怪訝顔をした。

「はあ。よくお察しで」

「老師が言っておられた。近々オレに弟分が二人増えるとな」

彼は、左の掌に右の手を添えた。拱手きょつしゅという、一種の敬礼である。  
「遼西郡令支せんにょうくわんしの産にて、姓は公孫こうそん、名は【王賛さん】、字して伯珪はくけい」  
「れつ、令支の、公孫っ」

徳然は弾けるように玄德にすがり付き、大慌てで手を拱くんだ。

「食客百人と噂される、あの公孫家の、ご令息であられる？」

「はははっ。話五分、いや、一分といったところと思つてくれ。さて……」

公孫【王賛】伯珪は、焦り過ぎの徳然から、落ち着き過ぎな玄德に視線を転じた。

「賢弟、名を覚えてくれまいか？」

玄德は右の掌に左の拳を打ち付けた。

「【タク】郡【タク】県の生まれ。劉備、字は玄德」  
沈黙があつた。

伯珪は暫し押し黙つた後に、

「名付け親は……どういふつもりで賢弟の名を定めたものかと、唸つた。

「己で付けました」

事もなげな返答が、玄德の口から発せられた。

再度、伯珪の目が見開かれた。

その大穴を、玄德の幽かな炎の宿る瞳が、見据えた。

蒼く、柔らかい炎だった。

奇妙な安堵を感じる。

「大したタマだな」

吐いて出たのは、嘆息か感嘆か。

『両方だ』

伯珪は、微かに笑んだ。

「あ、あの……」

徳然が、恐る恐る訊ねる。

「玄德の名は、それほどに珍妙なものでしょうか？ 私には、普通の、良い名に思えるのですが」

伯珪は質問者ではなく、玄徳の目をじっと見据え、答えた。

「『玄』とは、世の全ての色を合わせた色のことだが、世の全てを統べる天をも意味する。そちらの意として、名の『備』と併せると、『天の徳を備える』となる。さらに、苗字の……帝室と同姓の『劉』を接げると……」

「『劉の天の徳を備える』……？ 帝室の天……。……天子……の徳を備え……る！？」

徳然は、又従弟を顧みた。

彼は笑っていた。

はにかみと寂しさと力強さが融合する、なんとも不思議な微笑を浮かべていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4071u/>

---

桑の樹の枝の天蓋の内

2011年7月1日03時25分発行